



境界不明瞭で不確かな疾患 ——てんかんに携わる医師、必携の書

評者 浜野晋一郎 埼玉県立小児医療センター神経科部長

最近、書店で医学書を眺めていると、「すべきこと」と「してはいけないこと」、それだけがてっとり早くわかるガイドライン・マニュアルの類いと、疾患単位ごとに病態と治療が詳細にまとめられた重厚な成書に二極化している感がある。長文を読まず最低限のことだけスマホ感覚で知っておきたい人種と、深く深く掘り下げたいオタク的な人種に起因した二極化に思われる。そのほかに、買っただけで安心してほとんど読まず、読んでも拾い読みの私のような中途半端な人種も少なからずいるのだろう。

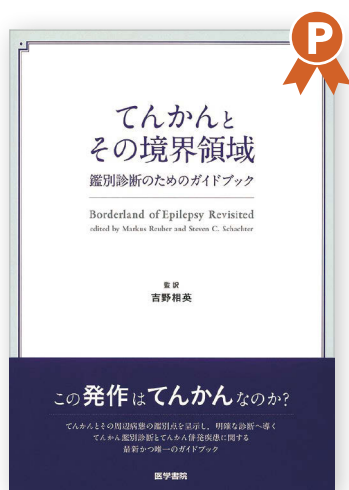
本書は、私のような中途半端な人種でも、一度眺めてみたら第1章から読み進んでしまう不思議な本である。具体的な症例呈示が多いからかもしれない。

ただし、第1章の William Gowers は、てんかん症例として記載されているわけではない。本書の表題が、1907年に出版された『The Border-land of Epilepsy』という Gowers の著作に由来しているためである。『The Border-land of Epilepsy』は誤診されていた症例の臨床経験をもとに、「てんかんと見誤りやすい周辺疾患」を解説した成書である。本書もその系譜を受け継ぎ、50以上の症例が提示されている。症例の具体的な記載により、目の前にいる患者として疾患の理解を深められる。

Gowers の著作から100年間のてんかん学の進歩にも対応し、自己免疫介在性てんかん、片頭痛と migralepsy、小児のてんかん性脳症、自閉症、チック、ならびにてんかん発作の前駆現象においては、てんかん発作の予知に関する取り組みも解説している。併存症としてうつ病、精神病、パーソナリティ障害をとり上げ、アルコールとの関連にも一章を割き、てんかん併発疾患がほとんど網羅されている。

本書を読んで痛感することは、100年前と変わらないてんかん診療における「問診」の重要性である。患者と観察者に注意深く耳を傾け、症状の本質を引き出す能動的な問診の大切さが、本書の柱になっている。まさに、Gowers から受け継いだ理念である。さらに、具体的な症例呈示も Gowers から受け継がれており、「患者から学ぶ」、そのことを改めて実感させられる本である。てんかんという境界不明瞭で不確かな疾患は、除外診断が重要で、ガイドラインとマニュアルが示す中核の病態とそれに基づく治療だけでは落とし穴だらけになる。だからこそ、本書は“ガイドライン・マニュアル派”の医師にとっても必携の書と思われる。

最後に、訳本である本書に関して1点付記したい。監訳者の吉野相英教授(防衛医大精神科)、訳者の1人の立澤賢孝講師(防衛医大精神科)は、7年前に Peter W. Kaplan と Robert S. Fisher の『Imitators of Epilepsy』を翻訳し、『てんかん鑑別診断学』(医学書院、2010)として出版している。本書の翻訳に最適なお2人が参加していることも、本書をお勧めする要素の1つである。



てんかんと その境界領域

鑑別診断のためのガイドブック

Markus Reuber、
Steven Schachter = 編
吉野相英 = 監訳

定価: 本体 10,000 円 + 税
B5 判・344 頁 / 医学書院 / 2017
[ISBN978-4-260-03023-6]